

市立幼稚園の在り方検討について

視点3 特別支援教育の充実

【背景】

- ・市立小・中学校の特別支援学級に在籍する児童・生徒の数が、2008年の約1,400人から2018年に約2,800人となるなど、年々増加傾向にある。
- ・特別な教育的支援を必要とする子どもの増加に加え、障がいの重度・重複化や多様化に対する支援が必要となっている。
- ・幼児教育施設においては、特別な教育的支援を必要とする幼児に対し、教師や多くの幼児と集団で生活することを通して、全体的な発達を促していくことに配慮することが求められている。
- ・特別な教育的支援を必要とする幼児に対して、園だけでなく家庭や地域での生活を含め、長期的な視点で幼児期から学校卒業後までの一貫した支援の必要性が高まっている。
- ・障がいのある子どもとない子どもが共に教育を受ける「インクルーシブ教育」の理念を踏まえた教育・保育の実践が求められている。

3—① 一人一人の状況に応じた適切な幼児教育の提供

個々の幼児の教育的ニーズに応じた指導内容や指導方法の充実

近年増加傾向にある特別な教育的支援を必要とする幼児に対して、個々の障がいの状態に応じ、幼児教育施設での集団の生活を通じた教育・保育や、計画的かつ長期的な視点に基づいた支援を行っていくことが重要である。

「特別な配慮を必要とする幼児（障害のある幼児など）への指導」の幼稚園教育要領での位置付け（第1章 総則 第5の1）

障害のある幼児などの指導に当たっては、集団の中で生活することを通して全体的な発達を促していくことに配慮し、特別支援学校などの助言又は援助を活用しつつ、個々の幼児の障害の状態などに応じた指導内容や指導方法の工夫を組織的かつ計画的に行うものとする。また、家庭、地域及び医療や福祉、保健等の業務を行う関係機関との連携を図り、長期的な視点で幼児への教育的支援を行うために、個別の教育支援計画を作成し活用することに努めるとともに、個々の幼児の実態を的確に把握し、個別の指導計画を作成し活用することに努めるものとする。

【これまでの取組】

- ・市立幼稚園では、特別な教育的支援を必要とする幼児の支援を園全体として推進する特別支援教育コーディネーターが中心となり、長期的な視点による一貫した支援を行うために、個別の教育支援計画を作成・活用している。

- ・園長が園全体の特別支援教育の体制を整備するとともに、特別支援教育コーディネーターと学級担任や支援担当者が連携し、特別な教育的支援を必要とする幼児の状態に応じたきめ細かな支援内容を検討し、指導に当たってきた。
- ・個別の教育支援計画を保護者と共有し、計画に基づいた日々の教育の経過や家庭における接し方などを確かめ合いながら、支援を進めてきている。
- ・教育的支援を必要とする幼児の状態などについて教職員全体で共有するとともに、個別の教育支援計画の見直しを適宜行っている。
- ・子どもの発達等に悩みを抱える保護者からの就学等に関わる教育相談を実施し、保護者のニーズや幼児の状態等を子どもが通う園に伝え、指導内容や指導方法を共有して実践に生かせるようにしてきた。

【課題】

- ・教育的支援を必要とする幼児の障がいの重度・重複化や多様化などへの対応
- ・早期からの一貫性・継続性のある支援の実施

【今後の方向性】

- ◎障がいの重度・重複化や多様化に対応するための支援の充実
- ◎早期からの一貫性・継続性のある幼児と保護者への支援を充実するために、個別の教育支援計画「サポートファイルさっぽろ」の作成・活用の促進

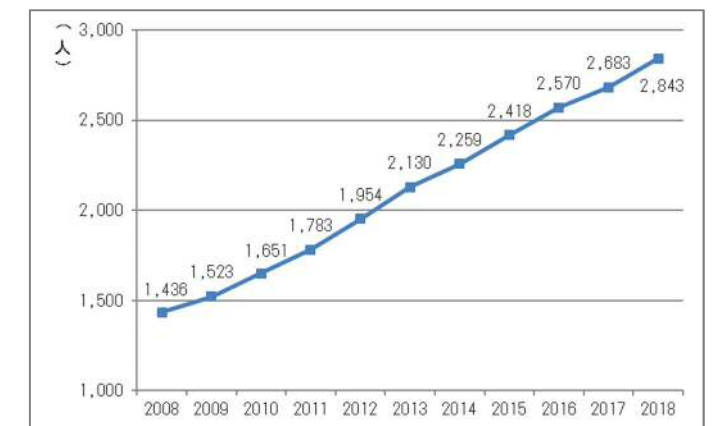


表1 札幌市立小・中学校特別支援学級の在籍者数の推移

障がいのある幼児とない幼児が共に遊び、学ぶ機会の効果的な設定

幼児の段階から障がいのある幼児とない幼児が交流や協働する機会を設けることは、障がいや障がいのある人への理解の基礎が培われる重要な取組であり、今後もより一層推進していくことが必要である。

【これまでの取組】

- ・市立幼稚園では、早期から、特別な教育的支援を必要とする幼児の指導に取り組み、支援の有無に関わらず全ての幼児が同じ環境のもと、共に遊び、学ぶ教育・保育を行ってきた。
- ・幼児の障がい等の特性を一人一人の個性として受け止め、その子のよさを伸ばす個別の教育支援計画を作成し、指導に当たるとともに、子ども同士が互いの「違い」や「個性」を認め合う環境をつくってきた。

市立幼稚園の在り方検討について

・市立幼稚園では、幼児教育施設において、障がいのある幼児とない幼児が共に遊び、学ぶ活動を行う際の参考となるように、実践研究の成果の発信を行ってきた。

【課題】

・インクルーシブ教育に関する教職員の意識の向上や、適切な教育課程の編成

【今後の方向性】

◎障がいのある幼児とない幼児が集団の中で共に育ち合う教育に関する実践研究と、研究成果の発信の充実

特別支援教育に関わる研究成果の発信や研修機会の提供

全ての幼児教育施設において、充実した特別支援教育やインクルーシブ教育が行われるように、市立幼稚園における実践研究の成果の発信や、幼児教育施設のニーズに応じた研修機会の提供などを行っていく必要がある。

【これまでの取組】

・市立幼稚園において、地域公開保育や幼児教育センター研修における公開保育を通して、充実した特別支援教育の在り方について幼児教育施設等に発信してきた。
・特別な教育的支援を必要とする幼児を担当する私立幼稚園等の教員に対し、個別の教育支援計画の作成や活用の方法など、特別支援教育に特化した内容の研修を実施してきた。

【課題】

・幼児教育施設の教職員のニーズに応じた研修や組織として成果を活用できる研修の実施
・多様な幼児教育施設が活用できるような、研究内容のまとめ方や発信の仕方などの改善

【今後の方向性】

◎特別支援教育の新たな動向や課題などに対応し、幼児教育施設のニーズに応じた実践研究の推進
◎幼児教育施設の実態や教職員の経験に応じた研修機会の拡充及び方法等の工夫

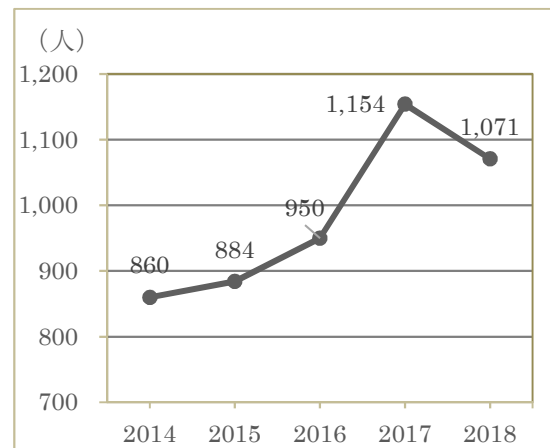


表2 特別な教育的支援を必要とする幼児の支援担当者研修の参加状況

視点4 幼保小連携の推進及び家庭教育支援の充実

【背景】

・幼児教育と小学校以降の教育には、様々な違いが存在しており、小1プロブレムなどの問題が顕在化している。
・子どもの発達や学びの連続性を保障するため、幼児教育施設と小学校がそれぞれの段階における役割と責任を果たすとともに、円滑に連携・接続し、体系的な教育が組織的に行われる必要性が高まっている。
・都市化や核家族化、少子化や情報化など社会状況が変化の中で、育児に対する不安感が強く、子どもにどのように関わったらよいか悩んだり、孤立感を募らせたりする保護者の増加や、児童虐待の件数の増加などといった様々な課題が指摘されている。

4-① 幼児教育施設間、学校段階等間の相互理解と円滑な接続

幼児教育施設間及び小学校との相互理解の促進

幼児教育施設間が互いに理解し合うとともに、小学校への円滑な就学を図るため、市立幼稚園において、幼児期の教育と小学校の教育との接続について研究を重ね、その成果を幼児教育施設に普及していくなど、幼小接続の取組をより一層推進する必要がある。

【これまでの取組】

・市立幼稚園が中核となって、各区の幼児教育施設と小学校の教職員が集まる「幼保小連携推進協議会」を開催し、幼児教育や小学校教育に関する情報の共有等を行ってきた。
・幼児教育施設と小学校間で、保護者の了解を得た引継が必要な幼児の引継を行う「幼保小連絡会」を開催し、円滑に就学できるよう連携体制の整備を進めてきた。
・幼児教育施設と小学校の連携・接続に関する「実践事例集」や「札幌市幼稚園教育課程編成の手引」を作成し、幼児教育施設と小学校に配付することで、それぞれの教育の特色などについての相互理解を図ってきた。
・幼稚園と小学校間の教職員の人事交流を行い、校種間の相互理解に基づいた教育の推進に努めてきた。

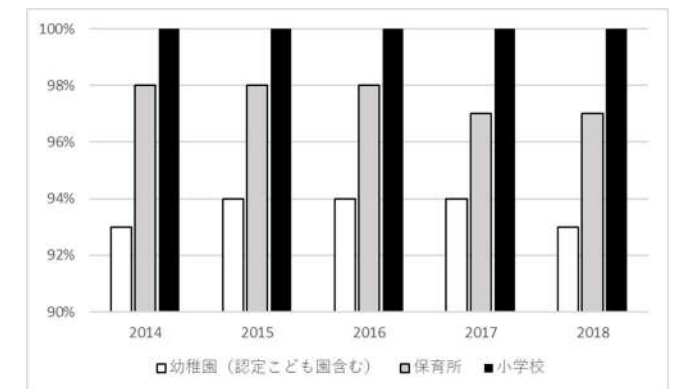


表3 幼保小連携推進協議会への参加割合

【課題】

・幼児教育施設間の相互理解を目的とした交流の機会や方法の改善

市立幼稚園の在り方検討について

- ・ 幼児教育と小学校教育の違いや幼児教育施設と小学校の教育課程の接続について、より理解を深めるとともに、発達や学びの連続性を踏まえた指導内容や指導方法の一層の工夫が必要
- ・ 増加する多様な幼児教育施設のニーズへの対応

【今後の方向性】

- ◎ 幼児教育施設間及び小学校との連携が促進される組織体制の検討
- ◎ 幼保小連携の意義の一層の浸透と幼保小連携推進協議会の活性化

幼児期と児童期の教育課程の接続の充実に向けた支援

幼児教育から小学校教育への円滑な接続等を図るために、幼児教育施設及び小学校において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、幼児期と児童期をつなぐカリキュラムを編成・実施し、円滑な接続を行うことが重要である。

【これまでの取組】

- ・ 市立幼稚園においては、実践研究を通して「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の具体を明らかにするとともに、カリキュラムの編成・実施及び改善を進めてきた。
- ・ 小学校が編成・実施しているスタートカリキュラムについて、近隣の市立幼稚園が連携し、内容の改善に関わる検討を進めてきた。
- ・ 幼保小連携推進協議会において、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をもとにした幼児・児童の姿や教育課程の接続に関する課題の共有、幼稚園と小学校それぞれの教育委員会担当者による講話などを通して子どもの育ちのつながりについての理解促進を図ってきた。

【課題】

- ・ 幼児教育施設と小学校の協働による連携・接続に関するカリキュラムの編成・実施

【今後の方向性】

- ・ 幼児教育施設と小学校の連携・接続カリキュラムの編成・実施に関する、市立幼稚園の先行実践の札幌市全体への発信及び啓発
- ・ 先行実践の事例や資料を活用した幼児教育施設と小学校向けの研修機会の提供

4-② 家庭教育支援（子育ての支援）の充実

地域における幼児期の教育のセンターとしての子育ての支援の充実

- ・ 市立幼稚園は、育児に対して不安を抱える保護者の相談窓口となるなど、子育ての支援に努め、地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たしていく必要がある。

【これまでの取組】

- ・ 市立幼稚園では、家庭の教育力の向上を目的に、幼児期の教育の理解啓発や、幼児期の子育ての情報提供、保護者からの教育相談を行う「ポロップひろば」を開催してきた。
- ・ 市立幼稚園の保護者に対し、子どもと関わり、よさを認め、成長を促すために作成したリーフレット『さっぽろっ子「学び」のススメ【幼児版】』を配付し、活用を促してきた。
- ・ 保護者が幼児の遊びや活動に参加し、自発的な遊びの中で子どもの育ちや幼児期に育みたい力等について園と保護者が共有する保育参加型参観・懇談会を開催してきた。
- ・ 保護者の就労など様々な家庭の状況に対応できるよう預かり保育を実施してきた。
- ・ 市立幼稚園の教諭や幼児教育支援員が、区保育・子育て支援センターの子育て講座講師となり、幼児期の教育に関することなどについて発信してきた。

【課題】

- ・ 多様化する子育て家庭を支援するための効果的なアプローチや家庭教育支援事業の情報提供
- ・ 幼児教育施設・家庭・地域が一体となって、子どもの教育に取り組む環境づくりの推進

【今後の方向性】

- ◎ 保護者が安心して子育てができるよう、家庭や地域の教育力を生かした幼児教育の実践研究の推進と研究成果の発信
- ◎ 「ポロップひろば」における「子育て講座」の普及に向けた私立幼稚園等との連携の充実
- ◎ 『さっぽろっ子「学び」のススメ【幼児版】』の普及・活用の拡大

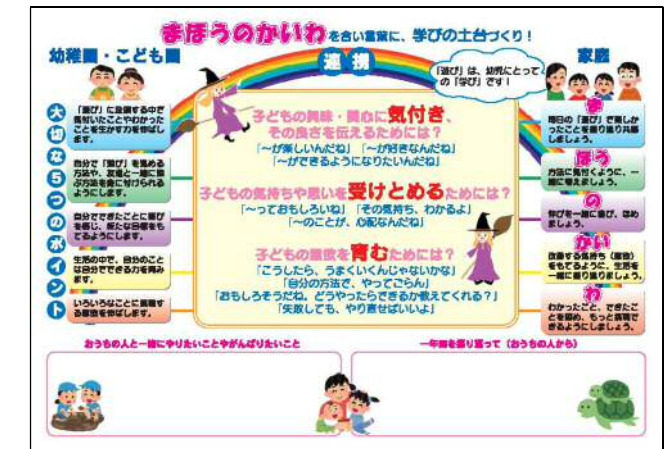


表4 『さっぽろっ子「学び」のススメ【幼児版】』